北京日本人学校における進路指導

前在中華人民共和国日本国大使館附属北京日本人学校　教諭
名古屋大学教育学部附属中・高等学校　教諭　薫　森　英　夫

キーワード：在外教育施設、進路指導、北京、中国、入試相談、たてわり班活動、学習指導、帰国子女枠

１．はじめに

縁あって再び在外教育施設で教鞭をとる機会を頂いた。これは家族や所属校をはじめ、多くの方々の理解と支えがあって実現したものだった。前回の経験を新しい職場で生かしたいと思いながら赴任したが、そこでまた新たに経験した貴重な体験を紹介することで、今後在外教育施設、特にアジア方面に赴任されたり、進路指導をされたりする方々の参考になればと考え、まとめた。

２．北京日本人学校の特徴

様々な要因で日中関係が冷え込み、大気汚染による人体への影響を企業が憂慮し始めた時期に北京日本人学校に赴任した。赴任当初は小中学生合わせて600人超の児童生徒数を誇る大規模在外教育施設だったが、帰任近くには400人を割るかどうかという事態になるぐらい、学校にとっては激動の２年間であった。

在中国日本国大使館訪問も進路指導の一環

各方面から優秀な職員が集まり、児童生徒に良い教育をという思いで皆毎日遅くまで働いていた。私が２年連続で担当した中学３年生は、半数近くの生徒が何らかの形で中国と血縁的にゆかりがあった点が特徴的であった。他の日本人学校と同じく、全都道府県を視野に入れた高校進学指導はもちろんだが、現地校への進学、インターナショナルスクールへの進学・転学、アジア・ヨーロッパ・北米への進学を視野に入れて学校生活を送っている生徒が共に学んでいた。

３．進路指導について

来年度に創立30周年行事を控える伝統校らしく、進路指導はずいぶん体系化され、帰任者が残していった資料や先輩からの引き継ぎもあり、仕事内容はわかりやすかった。進路指導の仕事自体は随分多岐に渡っていたが、周囲のサポートやアドバイスを受けながら、何とかやりくりできた２年であった。一方、不明瞭だったり形骸化してしまったりした点も多々あり、伝統と現状のバランスを考慮しながら改善していく必要があった。

４．進路指導上困難だったこと

(1) 志望校の幅広さ

前述した通り、生徒が志望する学校は47都道府県に収まらず、北京を含む中国都市部、アジア・ミクロネシア、北米、ヨーロッパと本当に多様であった。同じ志望校でも多種多様な受験日程・制度によって出願書類やその記入方法が違い、調査書などの出願に必要な書類を作成するためには細心の注意を払う必要があった。募集要項などでは確認できないことが多くあり、志望校に電話やメールなどで連絡を取り合うことが必須であった。また、関東地区の私立学校においては入試相談制度があり、12月中旬に受験生の成績などをもとに合格の可能性などを相談できることを初めて知った。これは受験生にとっては非常に便利な制度であった。

(2) 1 学期の学校行事の多さ

中学校 3 年生は、落ち着いて学習する時間がないほど忙しい。北京日本人学校の特徴である「全校たてわり班活動」の中心として、リーダー会議、遠足、運動会応援合戦計画、たてわり班清掃など、毎日リーダーの職務に追われていた。いくら「全校たてわり班活動」が教育的効果があるとはいえ、生徒が授業に集中できないほど疲れ果てていることに衝撃を受けた。それが難関志望校を目指す生徒の進路指導・学習指導に大きな障壁となっていた。

(3) 教員の多忙さ

忙しいのは何も生徒だけではなかった。北京日本人学校では、ほぼ毎日 12 時間から 14 時間働き続けなければ進路指導を含めた通常業務が終了しないという現実があった。それ以外にも仕事を自宅に持ち帰ったり、週末出勤したりしないとまわらないこともたくさんあった。全ての在外教育施設がそうであるとは限らないが、学校によって随分差があるようである。また、同じ学校内においても仕事量には明らかに隔たりがあった。

(4) 志望校の難易度と生徒の学力差、それに対する学習指導の難しさ

前述したように、生徒の志望校は全世界にまたがっていたが、そのほとんどが名門高校であった。中には全国トップレベルの高校しか受験しない生徒もいた。もちろん、基礎基本の修得がまだおぼつかない生徒もいたので、生徒の学力に大きな隔たりがあるという点においては、日本の公立学校と何らかわりはない。また、生徒の学力がなかなか上がらないまま、高いレベルの高校を志望し続ける家庭が多くあった。自分の子どもが少しでも高いレベルの高校で教育を受けられるように、その準備段階として日本人学校に多くを期待することは当たり前であり、厳密に言えば私立学校である在外教育施設が応えるべきところである。しかし、北京日本人学校では生徒の安全確保という名目上、早朝登校後、放課後、昼休み中や長期休業中において補習や補充のような学習指導は行っていない。そこで際立つのが学習塾の存在である。学習塾はそのネットワークを活用して進路指導に関する情報も多く、きめ細かな教科指導で保護者や生徒の信頼を勝ち取らないと経営難に陥る。出来るだけ高い学力・高いレベルへの合格という、経営方針もぶれない。一方で北京日本人学校は、文部科学省の学習指導要領に則った教育を行うことが絶対である。知育・徳育・体育の 3 本柱は重要な要素である。公立学校でしか勤務した経験がないスタッフが多ければ、全国的にトップレベルの受験に対応するための学習指導を全教科が行うことはなかなか難しい。そうすると、生徒や保護者の信頼は学校ではなく塾に傾いていく。この点も、北京日本人学校で進路指導をする上で非常に難しいことであった。

(5) 進路指導に関する内規やルールについて

進路指導に関してはほとんどの学校で様々な内規やルールがあるように、北京日本人学校にも進路に関する内規やルールがたくさんあった。これらの多くは前任者から口頭で伝えられたものであり、それに違反した場合の対処法などが明確にあるわけではないので、2 年目に混乱をきたした。いろいろな形で内規を破るケースが続出したのである。懇切丁寧に何度も説明会や文書で内規やルールに関して保護者や生徒に説明してきたにもかかわらず、である。ほとんどの保護者や生徒には内規やルールに則って受験に臨んでいただけたが、自分の子どもの意見を尊重するあまり、学校が定めたルールを破り、学校の説明にも全く耳を貸さない保護者が出てきてしまったことは本当に残念であった。

5．帰国子女枠入試の驚き

2 年間の進路指導で最も驚いたのがこの制度である。まずはじめに断っておかないといけないが、帰国子女枠と言っても、学校により基準や優遇制度が大きく違う。海外生活の長さ、帰国してから受験までの年数などがその基準とされているので、志望校に基準を問い合わせる必要があった。それ自体はたいしたことではないが、帰

国子女の認定を受けるために、限られた時間内で書類のやり取りを日本（志望校）と中国（生徒の居留地）の間で行わなければならない点は、学校も保護者もなかなか大変であった。特に入試説明会に参加しないと帰国子女の申請書を入手できない学校が多く、受験生が中国在住のために日本の親戚や友人を頼る家庭が多かった。また、国際郵便の事情があまり良くなく、特に中国の休日前後はEMS（Express Mail Service）でも通常の倍以上の日数を掛けて郵便物が届くことも珍しくなかったので、そうしたことも考慮しながら期日までにすべての書類を揃えて申請する必要があった。生徒から申請書を朝手渡され、必要事項を記入して厳封し、昼までに保護者に渡して欲しいと依頼されることもあったほどだ。

そしてこの制度で何より驚いたのは、その優遇制度の中身である。例えば遅刻や欠席が多く、生活態度があまり模範的とは言えない生徒で、成績も限りなく下位に近くても、この帰国子女枠入試を用いて全国にその名が轟く有名校に合格してしまうことがあった。進路指導上だけでなく、学習指導上でもやはり高校入学後のことを考えて、その生徒の選択はあまりお奨めできないものであった。しかし、全国トップレベルの高校に自分の能力を用いて出願することはよいことである。それが名門大学系属校であるならば、そこに進学したくなるのも無理はない。こうした動きは、特に血縁上海外生活が長く、日本語と外国語が堪能な生徒に多かった。彼らはある程度の外国語運用能力（例えば新漢語水平考試、通称HSK）を取得することにより、グローバル化を進めている有名私立高校に合格することが通常より容易となっていた。

６．成果と課題

(1) 成果

①引き継ぎの明文化

伝統ある北京日本人学校が培ってきた進路指導に関する資料は宝であり、それを引き継いでいくことはとても大切なことである。一見日本での指導方法と異なり、「これで大丈夫かな?」と感じることがあっても、中国、または北京、または北京日本人学校の諸事情を考慮したらその方法が最適、ということが多い。それらを口頭で引き継ぐことが伝統的であったが、出来るだけ文書に残すことにより、いつ誰が担当しても進路指導の概要が分かるように努めた。

②進路指導関連行事の強化と精選

ここ数年来、北京日本人学校の進路指導関連の行事はどんどん増えている。これは児童生徒数が様々な要因で減少する中でも、児童生徒や保護者、つまり在外教育施設（私立学校）にとっての顧客たる方々に、少しでも進路指導に満足頂けるようにという表れである。場合によっては児童生徒の転出を招くかもしれない、インターナショナルスクールの学校説明会を開催したこと、某有名私立高校の受験会場になったことなどは、短期的視野ではなく長期的視野で必ず学校に有益をもたらすと確信して行ったことである。

北京大生（本校卒業生）による進路講話

一方、前述したように進路指導に携わる教員はあまりに忙しく、絶対にミスの許されない事務処理を年中行うので、進路関連行事を精選する必要があった。そこで夏季休業中に行われていた「高校訪問（進路担当者が生徒と保護者と共に日本の高校を見学すること）」を取りやめた。進路指導を含めた通常業務を大幅に圧迫していた行事であり、生徒や保護者からの反対も特になかったので、中止は適切だったと言える。

③中３の環境整備

前述したように、中３は「全校たてわり班活動」など、学校の中心として非常に多忙であり、落ち着いて学習する時間がなかった。特に９月上旬までは毎日リーダーとしての仕事に追われていた。この状態を少しでも解消

出来るように訴え続けることにより、少しずつではあるが、他学年がそのリーダー的役割を分担するようになり、受験生として落ち着いて学習できる環境が整い始めた。

(2) 課題

①内規の整理と違反者に対する対応

私が赴任中に出来なかった最も心残りな点である。内規の矛盾や違反者が出た場合の対処など、問題点は指摘してまとめ上げることは出来た。しかし帰任が決まった以上、様々な事情から次年度の進路指導方針に意見を述べることも出来ず、手つかずのまま帰国してしまった。守らせることが出来なくなったルールをどうするか、小学校と中学校での進路指導の大きな違いをどうするかを含め、後任者がしっかりと対応してこれらの問題を解決してくれると期待している。

②学習指導に対する職員の共通理解

私が進路指導主事を務めた２年目の春、中３の５教科を担当する先生方に「教科指導目標」を明示してもらった。これは、やはり基礎基本の修得だけでは到底成し得ない、難関校合格に向けた職員の授業に対する意識改革であった。しかし残念ながらこれだけでは当然意識改革など実現することは出来なかった。長期休業中の課題提示や長期休業明けの実力テストなど、授業時間以外に生徒に発展的な学習指導を促す機会は何度もあった。しかし、「今までやらなかった」事を理由にこういう機会を逃す教科があった。それが進路指導に直結するし、結果としても悪い方向に出ていたので、これも後任者がしっかりと対応してこの問題を解決してくれることを期待している。

③学習塾との関わり

前述したように、学習塾はその圧倒的情報量でかなり的確な進路指導を行っている。保護者の協力もあり、各地で行われる帰国子女向けセミナーで配付された資料をいくつか手にしたが、その内容には本当に驚かされた。在外教育施設も、それらを活用することにより、より適切な進路指導が出来ると確信している。ただし、それらをすべて鵜呑みにするのではなく、学校独自の進路指導と合わせ、学校・家庭・学習塾が連携しながら学習指導や進路指導を行えば、児童生徒や保護者の満足度はさらに増すことになる。学校はとかく、「塾が無理な進路指導をしている」と思いがちである。しかし実際にある塾の塾長に話を聞いてみると、必ずしも塾側からより高いレベルの難関校を薦めるのではなく、保護者や生徒からより高いレベルの受験指導を懇願してくるケースが少なくないという。生徒が高校に進学した後のことも考慮する、「いわゆる出口指導で終わらない指導」が出来る学校の強みを生かしつつ、塾との連携を深めていければよいと考える。

７．おわりに

諸事情により２年という短い期間の勤務ではあったが、本当に色々な方々の支えで無事に終わることが出来た。２度目の在外教育施設勤務ということと、小１から大学院生まで教えたことがある経験を生かして、それなりに北京日本人学校に貢献できたのでは、と考える。北京にあるが故に様々な情勢に左右される学習指導・進路指導であったが、２年間共に全員が志望上位校に合格できたのは何よりである。そしてそのほとんどが名門校であったことは、生徒や保護者の努力の賜であると同時に、北京日本人学校としてもそれに少しだけお力添えできたのではないかと考える。そのような流れが途絶えることなく、良き伝統として受け継がれ、そこに時代に合致した新しく的確な方針を加えていきながら、ますます北京日本人学校が発展していくことを願ってやまない。同時に、この報告が在外教育施設に関わる一人でも多くの方々に、何らかの形で役立つことを願う。

最後に、北京日本人学校の勤務に際し、その準備期間も含めて私を支えてくれたすべての方々に（すでに天国に召された４人を含めて）、心より謝辞を申し上げてこの報告を終わりたい。